目覚むれば天日眩し梨の花

山田真砂年

（「俳句界」6月号）

近年、愛媛県の南予地方でも梨の栽培は盛んになり、梨狩り園もいたる所にみられる。梨は桜や桃と同じくバラ科に分類されるが、その花は桜や桃に比べ地味で見逃されやすい。しかし初春には純白で可憐な花を沢山つける。一つの花蕾から6～7個の花を咲かせるのだから満開の折の見事さは想像に難くないと思う。中国では梨の木が古来とても愛された。かの玄宗皇帝は梨の庭園を造り、白い花の咲き誇る下で観劇を楽しんだという。日本の歌舞伎界のことを「梨園」と呼ぶのも玄宗の時代から由来したのかもしれない。我が国の梨の産地では、山の斜面に梨の木を植えることが多く、春になると一斉に開花が始まる。この句から、山が白く染まり、太陽の光を反射して眩しく輝く素晴らしい景色が見えてくる。尤も、梨好きの私は収穫も待ち遠しい気持ちになってしまった。